

Q4. スクールソーシャルワークを学ぶことはできますか？ → 東北公益文科大学の大学院で学べます！

全国で初めて大学院修士課程にスクール（学校）ソーシャルワーク教育課程を設置し、スクールソーシャルワーカーを育成しています。公益学修士として学際的な知識とスキルを身に付けながら、必要な科目を単位修得し、修士課程を修了することで、スクール（学校）ソーシャルワーク教育課程修了証が一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟より発行されます。

スクール（学校）ソーシャルワーク教育課程の受講資格

修士課程の出願資格を満たしている方で
社会福祉士 または
精神保健福祉士 の有資格者
※大学院入試の出願・受験時は、上記資格は取得見込みでも可。
教育課程の受講は、資格が取得できなかった場合は認められません。

スクール（学校）ソーシャルワーク教育課程および修士課程修了要件

- スクール（学校）ソーシャルワーク教育課程**
- 科目の履修 必修科目(7科目14単位)および選択必修科目(4科目から2単位)
- 本学修士課程**
- 科目の履修 入学時のカリキュラムから合計30単位以上
(基礎科目2単位、演習科目8単位、方法論科目6単位以上、主研究領域の専門科目を8単位以上)
 - 修士論文の作成
在学中に修士論文を作成し、修士論文審査・最終試験に合格する必要があります。

受講の流れ

本学大学院修士課程に入学し、修士課程の修了を目指しながら、本教育課程科目の単位を修得します。
受講の流れ（イメージ）

1 年次 春学期 (4月～9月)	1 年次 秋学期 (10月～3月)	2 年次 春学期 (4月～9月)	2 年次 秋学期 (10月～3月)
修士課程・本教育課程の科目履修			
	実習準備・実習		
	修士論文の執筆		

本教育課程の科目（カリキュラム）と有資格者等の履修免除

科目名	単位数	履修区分・科目履修の免除			
		SSW実務経験2年以上	教職普通免許保有	社会福祉士有資格	精神保健福祉士有資格
スクール(学校)ソーシャルワーク論	2	必修	必修	必修	必修
スクール(学校)ソーシャルワーク演習	2	必修	必修	必修	必修
スクール(学校)ソーシャルワーク実習指導	2	免除	必修	必修	必修
スクール(学校)ソーシャルワーク実習	2	免除	必修	必修	必修
教育行政 ※	2	免除	免除	必修	必修
生徒指導論 ※	1	免除	免除	2単位以上 選択必修	2単位以上 選択必修
進路指導論 ※	1	免除	免除		
教育心理学 ※	2	免除	免除		
教育相談の理論と方法 ※	2	免除	免除		
精神保健学 ※	2	必修	必修	必修	免除
児童福祉論 ※	2	必修	必修	免除	必修
教育学 ※	2	履修推奨	履修推奨	履修推奨	履修推奨

※を付している科目の単位数は、修士課程の修了単位には含まれません

講師陣



まきの あきひろ
牧野 晶哲 先生
白梅学園大学 子ども学部家族・地域支援学科 准教授
東北公益文科大学大学院非常勤講師



たけだ まりこ
武田 真理子 先生
東北公益文科大学 公益学部 教授
大学院公益学研究科長



つちや よしこ
土屋 佳子 先生
日本社会事業大学 学長室社会福祉研修センター 客員准教授
東北公益文科大学大学院非常勤講師



ひび しんいち
日比 真一 先生
東北公益文科大学 公益学部 准教授

お問い合わせ

東北公益文科大学 大学院事務室

997-0035 山形県鶴岡市馬場町 14 番 1 号
TEL : 0235-29-0555 E-mail : gs@koeki-u.ac.jp
URL : https://www.koeki-u.ac.jp/academics/gs/

令和3年3月作成

東北公益文科大学 大学院

教えて！ スクールソーシャルワークのこと ～SSWerの“今”を紹介～

Q1. スクールソーシャルワーカー（SSWer）って何ですか？ → 子どもに寄り添う、「チーム学校」における 社会福祉の専門職です！

学校の先生や事務職員等と協働しながら、子どもと家庭、学校を支えます。いじめや不登校、その他のさまざまな問題に対し、学校の中にとどまらず、地域のさまざまな人や関係機関をつなげることができます。
また、学校の先生が授業や児童・生徒への指導という教育者としての本来業務に専念できるようサポートするとともに、子どもが元気に学び、成長できる環境を整えるため、子どもと保護者を学校の中と外の両方から支援します。

Q2. 具体的にどんなことをしていますか？ → 子どもたちや家庭、学校をサポートするべく、 話を聴き、調整し、問題解決を促します。

- 問題を抱える児童・生徒が置かれた環境への働きかけ
- 関係機関等とのネットワークの構築、連絡・調整
- 保護者や学校教職員等に対する支援・相談・情報提供
- 学校教職員等への研修活動・・・など

子どもたちにSSWerの存在を知ってもらう・身近に感じてもらうために、地元のラジオ番組でコーナーを受け持ってSSWerのことを紹介してみたり、保護者の負担軽減やニーズの吸い上げを目指して長期休暇中にイベント開催したりと、子どもたちや先生、保護者をサポートするためにさまざまな工夫をしています。

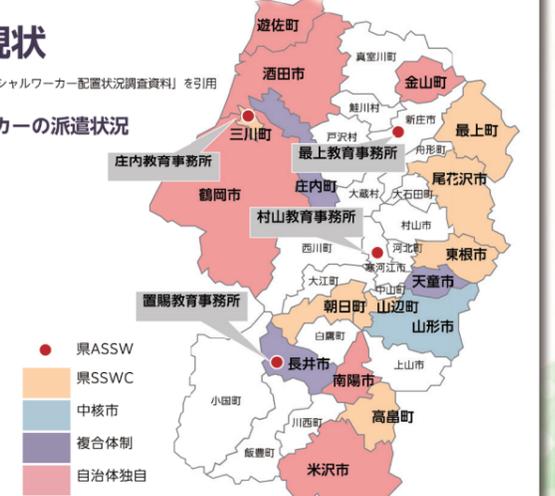
Q3. スクールソーシャルワーカーは身近にいますか？ → います！山形県にはいろいろな形で スクールソーシャルワーカーが活躍しています

山形県の現状

本間圭太郎「2020年度スクールソーシャルワーカー配置状況調査資料」を引用

山形県スクールソーシャルワーカーの派遣状況

- エリアSSW
・各教育事務所
(村山、最上、置賜、庄内)
- SSWコーディネーター
・三川町、庄内町、最上町、尾花沢市、東根市、天童市、山辺町、朝日町、長井市、高畠町
- 自治体独自配置SSW
・遊佐町、酒田市、庄内町、鶴岡市、金山町、天童市、南陽市、長井市、米沢市



「子どもふれあいサポーター」も、
子どもたちを支えています。

このリーフレットは、令和2年度
公益のふるさとづくり活動補助事業として
作成しました。

座談会 スクールソーシャルワークとその学び



たけだ まりこ
武田 真理子 先生
公益学研究科長

東北公益文科大学大学院で、スクールソーシャルワーク (SSW) について学ぶ4名の大学院生と、スクール (学校) ソーシャルワーク教育課程 (SSW 教育課程) を運営する教員とで、山形県における子どもたちと学校の今について、またスクールソーシャルワーカー (SSWer) に求められることや課題、学びについて、それぞれの立場からお話いただきました。(収録日 令和3年2月10日)

① 子どもたちと学校の今

杉山: コロナ禍で、学校ではマスク生活、部活動の制限など、子どもたちにとっては面白くないこともあるだろうと思います。ただ、学校には友達がいる、先生がいる。学校でつながり体験ができるということは大きいと感じます。

本間: 自分が子どもだった頃に比べると、学校がやわらかい雰囲気になっているというか、学校自体が子どもたちに歩み寄るような姿勢になっていると感じています。多様性を尊重するというインクルーシブな社会が意識される中で、学校では個別に対応する機会が大幅に増えている印象です。多様な子どもたちや家庭にあわせて動いている先生方を見てると、さすがだな〜と日々感じています。

武田: 先生方がきめこまやかにかわりながら、みんなと一緒に学校で学び合う姿勢が進んでいるということですね。それだけに、先生方の忙しさが増している。

齋藤鈴: 学習指導員をしても、先生方の忙しさをとても感じます。そんな中で、学校ではちゃんと子どもと向き合う時間をとっていらっしゃいますが、その子どもの家庭まで目を行き届かせることができるのだろうか、と思ったりもします。あと、自分が子どもだった時から考えても、子どもたちが多様化しているなど感じます。

齋藤祐子: ここ10年、いろいろな困難を抱えている子どもたちが増えていると感じます。子どもの発達の問題ももちろんありますが、保護者の養育環境や経済的な条件等の背景があって保護者の価値観も多様化していることもあり、子どもも何をすればいいのか、何を目標せばいいか迷ってしまうということがあるかと思っています。

「うちの子の個性を認めてもらいたい」といった多様な要求に、学校は本当に努力して応えています。昔は個別の要求があっても「そういうものではないですね」と先生があるべき姿を

示して、みんながそれに対して納得する雰囲気があったけれど、今はそうではない。自分を表現するのが望ましいという社会になっている中で、何をよとして生活すればいいかわからなくなっている子が増えている。やわらかい学校の雰囲気は、ある意味、子どもたちを楽なほうに流れやすくするというか、頑張れなくしてしまっている側面もあることは否定できないと感じます。

武田: 社会や学校が大きく変わってきている中で、子どもも子どもでいろいろ考えることがあり、むしろ戸惑っていることも多いということですね。

本間: 情報化が進んだことで選択肢の幅も広がり、生活や考え方などが複雑でわかりにくくなっていると感じることもあります。以前は学校に行くのは当たり前だとされていましたが、学校に行かなくてもいいという選択肢も増えました。しかし、学校に行かずに何をするかはあまりにも選択肢が多すぎて、自分で決めることがとても困難になっていると思います。

齋藤祐子: 保護者と先生との不登校に関する相談の場合、回を重ねていく毎に、保護者の困り感というか、どう子どもと接すればいいかという自信のなさの話になって、子どもの相談ではなくなります。

本間: 学校として考える方向性があったとしても、本人や家族に歩み寄らざるをえない感じになっているかと思っています。子どもたちやその家族を受け止めるために、学校があわせていく機会が多いです。

齋藤祐子: あわせることで、保護者の学校への信頼をつないでいると思います。

武田: すべては子どもたちのために、学校もそういった対応をしているということですね。

② SSWer に求められていること

武田: 学校も大きく変わる中で、少しずつではありますがSSWerの配置が進んでいます。先に話した現状に対して、SSWerに求められていることは何だと考えますか。

杉山: 牧野晶哲先生が担当されている授業「地域共創研究9 (スクール (学校) ソーシャルワーク論)」で、「SSWは家庭がしっかり愛を注げる環境をつくれる」とおっしゃっていたんです。まさにそうだな、と。SSWについていろいろと勉強するほど、知識や技術ももちろん大切なのですが、基本に立ち返っていくというかマインドの部分、前向きさや「なにかよりよい方法はないか」とともに考えていく姿勢を持ち続けることは大切なのかなと思います。

本間: 課題を抱えている子どもに対して、先生方はその子どもと直接関わっていくのが中心となるので、SSWerは子どもを取り巻く環境や成育歴などの背景、家庭と関わっていくことが期待されているのだと思います。ただ、課題解決に向けては即効性が求められていると感じているのですが、ケースによってはゆるやかに時間をかけていく方がいい場合もあります。学校でも、必要時にはスムーズに動ける体制を作っておくという意識が高まっているように感じています。

齋藤祐子: 何か問題が発生したときに、解決・改善を目指すのがベストなのだと思いますが、安定させることも大切だと考えます。問題を抜本的に解決することがすぐにできなくても、安定して、落ち着いて生活できる時間を長く持てるように援助するための教育相談であり、SSWerに求められることも、そういうことにつながる手立てなのではないかと思っています。

武田: 学校にはさまざまな専門職の方がいらっしゃいますが、先生はまずは教育、きちんと授業を行って、ひとりひとりの学びをたしかなものにするのが一番の仕事ですので、先生方にそ

こまでを求めるのは現状むずかしいのでは。

齋藤祐子: 教える・指導するというか、あるべき姿に育てることが先生が持っている特性なので、そこをカバーして、保護者に寄り添う、あるいは保護者を支えるというところが、SSWerに大きく期待されているところではないでしょうか。先生に相談するより、SSWerに相談するほうが敷居が低いというか、それが大きいのではないかと思います。教育相談の際、保護者はどうしても学校から何か指示や指導があるものと思っ

ていらっやいます。そうではなく、子どもも親も苦しんでいるし、先生方も迷っているというときに、別の意味から一緒に考えていこうという鍵を握っているのがSSWerではないでしょうか。いろいろな助け方ができるんだってということをみんなに伝える役割をSSWerが果たしている。

齋藤鈴: どんなSSWerになりたいかという点から考えると、社会福祉士として子どもや家庭に寄り添いながら、家庭と学校、地域をつなぐことのできるSSWerになりたいです。また、子どもたちにも保護者にも、先生ではないということは認識してもらいたいと思います。教えるという側ではなく、対等な立場でありたいと思います。

本間: SSWerはやはり子どもの隣にいる必要があると思います。実際の現場にいると家族や先生方の隣にすることが多くなるため、子どもの隣という立ち位置を意識するようにしています。必要な支援に手が届かない場合は近づけたり、攻撃を受けていれば盾になったり、SSWerは人と人や人と環境の境界面で動く仕事であり、バランスを取る事が大切だと考えています。困った時に手を伸ばす先として、SSWerが思い浮かぶように、広く伝えられればいいなと思います。

③ 大学院でSSWを学んでみて

杉山: 先に挙げた「前向きな姿勢を保つ」ことに必要なことと言われれば、それは教育、このSSW教育課程での2年間の学びはとても大きかったです。例えば、社会福祉士の勉強していると「必要最小限の介入」という言葉があって、申請主義の原則もそうなのですが、この言葉をどう実践するかは紙一重だと思っています。でも、SSW教育課程で学んだことで一歩踏み込めたというか、福祉の専門職としてやっぱり支援が必要なきには一緒にかかわらせていただくという、バランスの取り方がわかるようになったのもひとつです。SSW実習では、点と点が、学びの場面場面がこんな風につながっていくのかということが見えて、貴重な体験すべてが宝物です。この宝物をしまっておかずに、子どもたちのために還元していけたらと思っています。

齋藤鈴: 牧野晶哲先生が「SSWerとして働くのであれば、何か一つ武器を持つておくことが必要」とおっしゃっていたのが印象に残っています。単純に相談援助スキルがあるだけではやっていけないのではないかと思います。RJサークル (修復的対話に基づくサークル) などを通じて、福祉的な姿勢を子どもに伝えることも大事で、それも一つの武器だなと。

本間: 知識がほとんどない状態で現場に入ったため、大学院科目等履修生として地域共創研究9 (スクール (学校) ソーシ

アルワーク論) を履修し学べたことで、一気に視野が広がりました。更に翌年度には大学院に入学し、教育現場での活躍が続けている齋藤祐子さんや、行政職員の杉山さんと一緒に学ぶことができ、考え方の幅や高さが広がり、さらに奥行きという新たな軸もできたような感覚があります。自身の活動を振り返り、大学院で学び深め、現場に持ち帰り実践するというサイクルを繰り返す行なうことができました。SSWerとして勤めているだけではありえなかった出会いがあり、たくさんの人とつながることができ、今後もそのつながりが続いていくという安心感を得ることもできました。

武田: SSW教育課程が、こうやって多職種の皆さんの学び合いが深まっていく機会になっていけばいいなと思います。現場で連携していく方々が学びをともにできるのは大学院ならではのと思っています。

齋藤祐子: 学びたいと思っている多様な人たちが集まれる場としてこの大学院があることは、すごく貴重なことです。今子どもたちや学校を取り巻く社会の中で一番求められている多様性を認め一人一人を支える、まさに公益というものを学ぶSSW教育課程がここにあるということは、とても価値あることだと思います。

ほんま けいたろう
本間 圭太郎 さん / 社会福祉士
庄内町教育委員会 スクールソーシャルワーカー
公益学研究科 修士課程2年生
SSW教育課程1期生



すぎやま よしのり
杉山 義法 さん / 社会福祉士
酒田市職員 子ども・家庭支援を担当する業務を担当
公益学研究科 修士課程2年生
SSW教育課程1期生



さいとう ゆうこ
齋藤 祐子 さん
庄内町教育委員会 教育相談専門員
長く小学校教員として働いていた
公益学研究科 修士課程2年生



さいとう りん
齋藤 鈴 さん / 社会福祉士
小学校の学習指導員
公益学研究科 修士課程1年生
SSW教育課程2期生

